

る手段、パレスチナにおける「ユダヤ民族」(「血」)の再生の基盤という、それぞれ政治主義シオニズム、実践主義シオニズムにおける入植村の意味づけを指摘し、入植村がイデオロギー的に価値づけられて設けられた制度であることに注意を促したあと、イスラエル独立により入植社会独自のシオニズム権力体制が確立したとき、入植村のイデオロギー的意味は変わらざるをえないと論点を広げ、現実のイスラエル国家を統合するためのイデオロギーに転化したことを指摘している。

以上みてきたように一貫した問題意識が本書全体を貫き、全体として完成度の高い業績の積み重ねがみられる。ただ1つだけ評者の気にかかる点にふれておくとすると、著者が用いる「ナショナル」<ナショナルな>という用語の幅広さ、あるいは多義性ということである。たとえば、「民族的」性格をもった地域社会 (P.107)、ナショナルな性格を生み出した基本的契機 (P.107)、一つの「国民社会」形成 (P.180)、「ナショナル」なユダヤ人社会 (P.225) という多様な使い方がされる。実体のあいまいさに対応するならば、広いニュアンスを含む方がよいのだろうか、この点どうなのだろうか。

(千葉立也)

**谷岡武雄・浮田典良編：歴史地理学プロシーディングス**、古今書院、1982年、A5判、355頁

第24回国際地理学会議は1980年に東京で開催されたが、本書はその歴史地理学セッションの報告集である。編者のはしがきにもあるように、本書に収められた各報告は、セッションに提出されたペーパーに比べて、より詳細なものになっており、このような形で多くの人がセッションの成果を共有することができることは、まことに喜ばしい限りである。

本書は、第I部「空間組織の歴史的類型」、第II部「環境と景観の進化」、第III部「経済活動と人口の歴史的变化」および第IV部「歴史地理学の方法・技術および諸問題」の4部よりなり、計54に及ぶ報告が収録されている。これらの報告の内容はその対象、場所および時代的フレーム、問題関心や方法において極めて多様であって、個々の報告に立ち入って論評することは評者の力に余ることであるし、また、本書の性格からしても必ずしも適切なことではあるまい。したがって、ここでは、本書を概括的に検討してみることにしたい。

このプロシーディングスでまず注目すべきことは、日本の研究者の貢献であろう。報告数が54本中29本と過半数を占めるだけでなく、それぞれ内容的にも充実したものである。さらに、ホスト国として外国の研究者たちに、日本における歴史地理学の諸問題と、それらをめぐる研究成果の見取り図を呈示しようというオーガナイザーの配慮が看取される。たとえば、第I部「空間組織の歴史的類型」では、16本中12本を数える日本の研究者の報告によって、弥生、古代、中世、近世および明治の各時代について、地域組織や景観の問題が取り上げられており、各時代の日本の「空間的組織の歴史的類型」に関する問題とそれらをめぐっての研究成果について、ひとつの展望が得られるようにアレンジされているようである。セッションに参加した外国の研究者もこれによって裨益するところが多かったであろうことは想像に難くないが、本書の出版により、その見取り図を、日本の歴史地理および歴史地理学に関心を抱く者すべてが共有できることとなったのである。各方面の専門家の手になる優れた研究成果を簡潔な形で収録した本書は、日本の歴史地理学についての格好のリーディングスともなっていると言えよう。

外国の研究者の報告については、各国ごとの参加者数が少ないことから、その内容は個別的であり、あらかじめアレンジされたまとまりというものはないが、日本の研究者の報告と対比したとき、ひとつの特徴——歴史地理学の応用的側面への志向——が看取されるのである。なかでも、ピッカルディとスケースの報告は、それぞれ、歴史的環境や歴史的景観の復原や保全を、正面からテーマとして取り上げており、歴史地理学が、過去の景観や空間組織のテキストの中での再構成に限定されるものではなく、現在形の問題にも関わる分野であることを示している。もちろん、国や地域によって、史跡や歴史的建造物等の残存状態やそれらに対する人々の感受性も異なっているだろうから、“Planning the Past”の問題がどこでも同じような仕方では提起されるわけではないかもしれない。しかし、史跡や歴史的建造物が重要な文化遺産であることは言うまでもないことであり、かつ、それらの多くは、景観なり地域組織なりの空間的、あるいは地理的なコンテクストを離れては十分な意義を持ち得ないものであるから、歴史的環境や景観の復原や保全、およびそれについての人々の感受性を喚起することにおいて、歴史地

理学の果す役割は大きいと言わねばならない。

ところで、この国際会議のプロシーディングスを読んで、上述の2点にもまして、強く感じられることは、過去の景観や空間組織を文化交差的に解説するための方法の必要性ということであろう。この点に関して興味深いのは編者の人である谷岡武雄の報告である。谷岡は、古代河内国南部における空間組織の偏向型と正方位型の2つのタイプを検討した報告で、偏向型の空間組織を支配する原理として、ヨーロッパの巨石建物の配列にも通ずる、太陽の運行に関わる精神的な原理があったかもしれないことを示唆しているが、空間組織を支配するこのような原理に着目して、文化交差的な解説のための方法をつくり出してゆくことはできないだろうか。記号論的なアプローチで「古代日本における〈土地分類〉」のモデルを導出した千田稔の方法も、文化交差的な解説という点に関して、報告での対象を越える射程をもっているように思える。また一方、山田安彦は、様々な視角を組合せることで「古代東北日本のフロンティア」を読み解くための解説格子を準備しつつあるように思えるが、その究極の狙いは「フロンテ

ィア」の解説にあるようである。歴史地理学の研究成果は、相互に関連をもちつつも様々な方向へ伸びてゆく地下茎の豊饒と捉え難さを呈しているように思える。千田が指摘するように「……形態を実証的に見定める作業は研究の手続き上、経由しなければならない過程であることは認めなければならないであろう」が、実証的に再構成されたものの豊かさと多様性とをみると、再構成されたものにさらに働きかけていく営為の必要性が痛感されるのではないだろうか。そのような営為は、アネンコフが指摘しているような、どちらかと言えば紋切型のそれに限られる必要はない。また、このような努力は、ここで指摘しなかったが、本書に収録された実証的研究結果のなかに、すでにあることを述べておかねばならない。

本書は、歴史地理学に関心をもつ者すべてが繙くべきひとつのインヴェントリである。そこには、豊かさと捉え難さと、そして、それを乗り越えようとする努力とが、つまり、歴史地理学の可能性が見出されるであろう。  
(磯部啓三)